

目次

はじめに.....	v
本書で使用されている BTSJ の記号凡例.....	xv

第1章 語用論的分析に適した『BTSJ 日本語自然会話コーパス』構築の趣旨と特徴.....	1
宇佐美まゆみ	

第1部 日本語自然会話におけるポライトネス

第2章 ポライトネスと配慮—受諾と断りを伴う依頼の場合—.....	23
福島佐江子	
第3章 依頼表現の諸相—依頼の明示性の観点から—.....	45
ガヤ直美	
第4章 雑談に表出する依頼と受諾—「です・ます」体の使い分けと、自然会話を素材とする教材への応用の観点から—.....	67
大橋純 大橋裕子	
第5章 質問行為に伴う配慮—初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より—.....	85
重光由加	

第2部 日本語自然会話における会話のストラテジー

第6章 談話における終助詞「よね」—引き込みという観点から—.....	115
ナズキアン富美子	
第7章 自然会話における感動詞「あっ」の機能—日本語教育の観点から—.....	139
大塚容子	

第8章 友人同士の会話におけるディスコース・マーカ― ―性差の観点から―	161
田中リディア	
第3部 日本語自然会話におけるスタイルとその発達	
第9章 大学生の会話と性差―ジェンダー構築の観点から―	195
岡本成子	
第10章 会話の非流暢性 (disfluency)―会話スタイルの観点から―	219
長谷川葉子	
第11章 談話のインタラクションと言語発達 ―比較文化心理学の視点から―	245
南 雅彦	
索引	274
執筆者紹介 (執筆順)	280

目 次

はじめに.....	v
本書で使用されている BTSJ の記号凡例.....	xv

第 1 章 語用論的分析に適した『BTSJ 日本語自然会話コーパス』構築の趣旨と特徴.....	1
宇佐美まゆみ	

第 1 部 日本語自然会話におけるポライトネス

第 2 章 ポライトネスと配慮—受諾と断りを伴う依頼の場合—.....	23
福島佐江子	
第 3 章 依頼表現の諸相—依頼の明示性の観点から—.....	45
ガヤ直美	
第 4 章 雑談に表出する依頼と受諾—「です・ます」体の使い分けと、自然会話を素材とする教材への応用の観点から—.....	67
大橋純 大橋裕子	
第 5 章 質問行為に伴う配慮—初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より—.....	85
重光由加	

第 2 部 日本語自然会話における会話のストラテジー

第 6 章 談話における終助詞「よね」—引き込みという観点から—.....	115
ナズキアン富美子	
第 7 章 自然会話における感動詞「あっ」の機能—日本語教育の観点から—.....	139
大塚容子	

第8章 友人同士の会話におけるディスコース・マーカ― ―性差の観点から―.....	161
田中リディア	

第3部 日本語自然会話におけるスタイルとその発達

第9章 大学生の会話と性差―ジェンダー構築の観点から―.....	195
岡本成子	
第10章 会話の非流暢性 (disfluency)―会話スタイルの観点から―.....	219
長谷川葉子	
第11章 談話のインタラクションと言語発達 ―比較文化心理学の視点から―.....	245
南 雅彦	
索引	274
執筆者紹介 (執筆順)	280

第 1 章

語用論的分析に適した 『BTSJ 日本語自然会話コーパス』 構築の趣旨と特徴

宇佐美まゆみ

【要旨】

本章では、国立国語研究所『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 版¹』構築の趣旨とその特徴についてまとめる。本コーパスは、シナリオのない自発的に発話された自然会話を、年齢や性などの諸条件を統制して収集したものである。その前身となる複数の小型コーパス²を整備、拡充してきた「拡充型コーパス」³であり、現在一般公開されている自然会話コーパスの中では、世界最大規模のものの一つである。母語場面、接触場面における初対面会話、友人同士の会話や、教師と学生の論文指導場面、電話での依頼場面など、様々な場面において条件を統制して収集した会話が収録されている。その大きな特徴は、このコーパスが会話という相互作用の「語用論的分析」に適するように考えられたものであると

1 本コーパスは、2020年3月30日に公開された、現状では、最新のものである。本コーパスには、2018年版、2011年版をはじめ、いくつかの前身となるコーパスがある。そのため、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）』と版を示さず言及した場合は、文脈によって、最新版だけでなく、その前身となるコーパス（群）を総称して用いることもある。前身となるコーパスの展開については、本文末尾に「参考資料3」としてまとめ、簡単に説明した。本書の各章の研究で使用されているものは、主として本コーパスの「2017年先行リリース版」であるが、中には前身となるコーパスを利用したものもある。「2017年先行リリース版」を、内部確認、微修正を経て一般公開したのが、2018年版である。2020年版では、さらに、43会話が追加されている。

2 これら前身となるコーパスについては、本文末尾に「参考資料3」として記し、簡単に説明した。

3 ここでは、特定のコーパス本体に、小型コーパスの単位で、追加・拡充して構築していくタイプのコーパスを、「拡充型コーパス」と呼ぶ。

第2章

ポライトネスと配慮

—受諾と断りを伴う依頼の場合—

福島佐江子

【要旨】

本章ではポライトネスと配慮について考察する。研究対象とする発話行為は依頼に限り、受諾される依頼と断られる依頼においてどのような配慮がどこで現れるかについて調査する。配慮は依頼の受諾に関わり、対人関係を良好に保つためにも必要であると考えられる。『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』の中から対等な関係にある女性同士の4つの会話を選択し、分析した。その結果、受諾された依頼と断られた依頼の場合では異なる配慮が使用されていることが明らかになった。前者では、依頼者は相手との距離を縮めるような配慮を多く使用していた。これに対し後者では、依頼者は遠慮を示すような配慮を多く使用し、被依頼者は依頼を引き受けられなかったことに対する謝り等により配慮を示していた。依頼者のみならず、被依頼者も配慮を示していたことから、双方が良好な人間関係を構築していこうとすることが読み取れる。

【キーワード】

ポライトネス, 配慮, 依頼, 受諾, 断り

1. はじめに

ポライトネス研究において、ポライトネスとは何かについて議論されてきているが(Linguistic Politeness Research Group 2011: 2-5 参照)、その定義は未だ確立されたとは言い難く、多くのポライトネス研究者達がポライトネスとは何かを未だ模索していると言える(Fukushima and Sifianou 2017 参照)。Sifianou

第3章

依頼表現の諸相

—依頼の明示性の観点から—

ガヤ直美

【要旨】

本章は「依頼—断り」「依頼—承諾」の2つの会話の流れの中の依頼の形式を比べた。「依頼—断り」のデータでは明示的な依頼表現が多く「どう？」など相手の意向・都合を聞く表現は少ない一方、「依頼—承諾」のデータ中には明示的な依頼表現が少なく、依頼背景や内容を第三者の依頼として紹介した後で相手の意向・都合を聞く「どう？」「いい？」などの表現を用いることで依頼を表すことが多かった。さらに依頼の背景、内容の提示部分を精査することによって、「依頼—承諾」のデータでは依頼の背景・内容の提示がそのまま依頼として受け取られやすいのに対し、「依頼—断り」の場合は、依頼背景・内容の提示の部分に依頼の全貌が含まれているとは言い難いことが分かった。

これらの点から、依頼の明示性は単に「～てほしい」「～てくれない」などの明示的依頼表現があるかどうかだけでなく、他のディスコース中の要因によっても決まることがわかった。

【キーワード】

依頼, 承諾, 断り, ポライトネス, コンティンジェンシー

1. はじめに

数ある言語行為の中でも、依頼表現についての研究は多い(Blum-Kulka 1987, Clark and Schunk 1980, Francik and Clark 1985, Gagne 2010, Holmes and Stubbe 2003, Rinnert and Kobayashi 1999, Vine 2004, 2009 など)。依頼は相手

第4章

雑談に表出する依頼と受諾

—「です・ます」体の使い分けと、
自然会話を素材とする教材への応用の観点から—

大橋純 大橋裕子

【要旨】

本章では、宇佐美まゆみ監修(2017)『BTSJ 日本語会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』を用いて、会話参加者が共に意味を構築していく様子を示し、従来の話者と聞き手の情報伝達モデルの限界を明らかにすることで、言語行為論の影響を受けた第二外国語教育に自然会話データから得られた知見を取り入れることの重要性を強調する。次に、依頼と受諾の形、「です・ます」体の多様性に注目し、自然会話を教材として授業に取り入れるための例を挙げる。具体的には、Natural Conversation Reconstruction Tasks(自然会話再構築タスク：自然会話の意味としてまとまっている部分を抜粋し、その中のある部分を括弧で抜き、学習者に括弧抜き部分に話者が何と言ったか話し合わせるタスク)を用い、「です・ます」体が、状況に応じて様々な意味をなすということと、話者同士の関係性を考えさせるような教材例を提示する。

【キーワード】

雑談, です・ます体, 言語行為, 語用論, 貸借りの均衡

1. はじめに

人と人とのコミュニケーションをどう捉えるかによって、語学教育の目指す方向性が変わってくる。コミュニケーションを意思の伝達のためのやり取りであると考えた場合、どんな意思や情報をどのような語彙や文法で言語に

第5章

質問行為に伴う配慮

—初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より—

重光由加

【要旨】

本章では、雑談会話の中に見られる情報を求める質問とその答え方に焦点をあてる。『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』(宇佐美 2017)の中から、男性の初対面同士と親しい者同士の雑談会話を5組ずつ選び分析した。質問は会話を促進させる機能があると一般的に考えられているが、分析対象の発話文では、初対面会話では発話文中の4.5%、親しい者同士の会話では1.5%しかなかった。また、表現形式については、初対面会話では中途終了型が用いられることが多く、言いよどみながら質問をすることで遠慮や躊躇が表されていたことが観察された。一方、親しい者同士では、尋ねたいポイントだけを短く言う省略型の聞き返しの質問文(「いつ?」「行ったの?」など)が多く見られた。いずれも、質問内容は事実確認が多い。回答者側は、初対面会話では、直接回答を避けるものも見られたが、親しい者同士でも、直接的な回答だけを短く述べるものが見られた。

【キーワード】

質問行為、初対面会話、親しい者同士の会話、男性会話、配慮

1. はじめに

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』(宇佐美 2017) (以下『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2017年版』)の中から、日本語母語話者の男性の初対面の二人雑談会話5

第6章

談話における終助詞「よね」

—引き込みという観点から—

ナズキアン富美子

【要旨】

終助詞は情報や聞き手に対する話し手の様々な態度と関係があり、言語相互行為を行う上で不可欠な言語要素である。終助詞の中でも「よ」と「ね」に関する研究は色々な視点から多く行われているが、その組み合わせである「よね」に関しては十分解明されているとは言えない。一般的に「よね」は確認機能を果たすと言われているが、「ね」の確認機能とどのように異なるか疑問が残る。さらに、「よね」には共感を表示する機能もある。本研究では認識的アクセス、認識的優位性、認識的責任の三つの観点から「よね」が言語相互行為を行う上でどのように「引き込み」機能を果たすか調べた。「よね」の様々な「引き込み」機能を調べるため、ブログ・メッセージ、そして『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版』のコーパスの中から15の自然会話データを考察した。

【キーワード】

「よね」、談話機能、認識的観点、社会的行為、引き込み

1. はじめに

会話において話者(話し手)は単に情報を要求したり、または提供したりするだけでなく、相手の認識的、心的状態を考慮しながらインターアクションを行う。すなわち、話者は自分と相手の認識状態、例えば、情報・知識の所有(相手が情報を持っているかどうか)、情報に対する確信度(どのくらい情報に確信があるか)、情報の所有に関する責任(知る義務があるか、知るべ

第7章

自然会話における感動詞「あっ」の機能

—日本語教育の観点から—

大塚容子

【要旨】

本章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』における女性同士の初対面会話に現れた「あっ」を抽出し、その会話展開上の機能を考察する。「あっ」の出現数は同等会話、上下会話の間で大きな差はない。いずれの会話も注目表示、情報提供の発話文における出現数が多い。自然会話における「あっ」の出現状況の分析により、「あっ」はその後続する発話が、新たな情報の提供、話し手の聞き手への配慮の必要性の意識をマークする機能を有していることを示し、その理由を認知言語学の知見を踏まえて日本語会話の特徴の一つとして捉える。そして、日本語教育において「あっ」がどのように扱われているかを確認したうえで、自然会話の分析がどのように日本語教育に貢献するか、検討する。

【キーワード】

感動詞, 「あっ」, 会話展開, 配慮, 日本語教育

1. はじめに

会話は話し手と聞き手との共働作業で展開される。話し手が一方的に話しているだけでは会話にはならず、聞き手は話し手の発話内容が理解できれば、そのことをあいづちという形で示す。理解できないときには、「もう一度言っただけませんか。」などといった表現を使って聞き返しを行う。一方、話し手は、相手が自分の発話内容を十分に理解していないと認識すれば、言い換えや繰り返しを行うことによって自分の発話意図を相手に伝えよ

第8章

友人同士の会話におけるディスコース・マーカ―
―性差の観点から―

田中リディア

【要旨】

本章では、女性と男性の友人同士の会話における、「なんか」、「とか」と「みたいな」の Discourse Marker (DM) の頻度に差があるか否かを調査する。多くの先行研究で、女性が新しい言葉遣いの開拓者だと報告されている (Labov 1972, Trudgill 1972, Hill 1987, McDonald 1994, 遠藤 1997, Gal 1998, Laserna, Seih and Pennebaker 2014)。『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』に収録されている親しい友達の女性同士、男性同士の会話を 10 組ずつ選んで分析を試みた。「なんか」と引用としての「とか」の使用においてのみ、女性の方が男性より多く使うことが分かった。また、DM の使い方に違いが見られた。

【キーワード】

ディスコース・マーカ―、性差、なんか、とか、みたいな

1. はじめに

言葉は常に変化している。新しい単語や表現は絶えず作られ、その多くは流行語として短い期間に使われすぐ忘れられてしまう。一方で、一部のものは社会に浸透し、広く一般に使われるようになる。新しい単語・表現は必要性から生まれるものとそうでないものがある。「スマホ」とか「インスタ映え」という単語は 20 年前には存在しなかった。新しい技術がもたらした製品によって、そういう単語が作られたのである。政治や社会情勢に関連した言葉も流行する。「付度」という言葉が森友学園の事件に関して、元々の

第9章

大学生の会話と性差

—ジェンダー構築の観点から—

岡本成子

【要旨】

若い人たちの言葉遣いに性差がなくなってきたとメディアなどで言われ、先行研究も文末形の使用に性差がほとんどないと報告している。しかし、本当に性差がなくなったのだろうか。この疑問を検討するために、本章は3つの自然会話における数種の表現形式(文末形、ヘッジなどの言語形式と笑いなどのパラ言語形式)の使用を見た。その結果、文末形以外のものの使用にはかなりはっきりした性差が見られた。この結果を次の二つの観点から説明する。(1)言語とジェンダーの関係を理解するためには、1つか2つの言語形式だけでなく、様々な表現形式が会話全体でどう使われているかも調べる必要がある。(2)言語とジェンダーの関係は、ジェンダー規範をなすイデオロギーが介在した間接的なものである。したがって、話し手はその規範に対して自身のスタンスをとり、様々な表現形式を駆使して各コンテキストにふさわしいと思う自己のジェンダー(イメージ)を構築している。

【キーワード】

言葉の性差, 言語イデオロギー, 言語規範, 間接的指標性, ジェンダー構築

1. はじめに

若い(日本の)女性が乱暴な男性のような言葉を使うようになり、その一方で若い男性は、やさしくて女性的な言葉遣いになってきたとか、若い男女の話し方が中性化してきたといったようなことがメディアなどで指摘されることがある。特に女性の言葉についての「女性らしくない」話し方に対する

第10章

会話の非流暢性 (disfluency)

—会話スタイルの観点から—

長谷川葉子

【要旨】

人が言葉を介して交流するさい、その流れが円滑か否かは重大な関心事で、会話参加者は、自動的かつ無意識の内に会話の(非)流暢性を推し量り、逐次、話し方の調整を行っている。目的が定まっていない即興的雑談の遂行は、流暢さに欠けていて当然で、構造的・機能的に非常に複雑であり、鋭い洞察力や機敏さが必要となるため、行為者の会話遂行能力の巧拙が顕著に現れるものである。本章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』に収録されている対話の中で、特に非流暢性が目立った1人の話者に焦点を当てて分析し、この、直感的(非)流暢性判断の客観化を試みる。会話の非流暢性という概念は、決して、一元的ではなく、いくつかの要素が複雑に絡み合ったものであることは、容易に推測できるが、本章では、特に顕著であった、「間・話題転換・会話への貢献度・あいづち」の4要素を検討する。

【キーワード】

個人の間、共有の間、話題転換、会話への貢献度、あいづち

1. はじめに

人間の意図的行為には、当然のことながら、行為者の能力の巧拙が反映される。まして、その行為が構造的・機能的に複雑であれば、伎倆の差はさらに増幅され、目的が設定されていない雑談の遂行は、その好例である。それでは、一体、巧拙の差はどのような形で露呈するのだろうか。本章では、

第11章

談話のインタラクションと言語発達

—比較文化心理学の視点から—

南 雅彦

【要旨】

人間発達の主たる要因は、生得的な成熟要因と環境要因である。環境要因としての文化は、相互作用を通してコミュニケーションのさまざまな様相と関わっている。言語獲得や言語学習、また、こうした言語活動の最終目標・到達点であるコミュニケーションを捉える際に、文化と言語の密接な関係性に注目する必要がある。本章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声) 2017年先行リリース版』に収録されている男女の雑談と討論を用いて、成人日本語母語話者の会話の仕組みを、自己観(「自立した自己」vs.「相互依存的な自己」)やコンテキスト(「高コンテキスト」vs.「低コンテキスト」)などの比較文化心理学的視点から解釈を行い、さらには、コミュニケーションを「協調の原理」に基づいた語用論的な解釈を行うといったように、多方面から実証的に検証する。本章では、それだけにとどまらず、共同構築などの文化に特有な談話(ディスコース)スタイルに到達する過程として、音声言語だけでなく書記言語を含めた談話構造の発達過程を、言語発達・発達心理の観点から包括的に捉える。

【キーワード】

ディスコース, 自己観, 高コンテキスト, 低コンテキスト, 共同構築

1. はじめに

我々は日ごろから会話のやりとりや文章の読み書きといった言語行為を行っている。本章の目的は、成人日本語母語話者の会話の仕組みを実証的